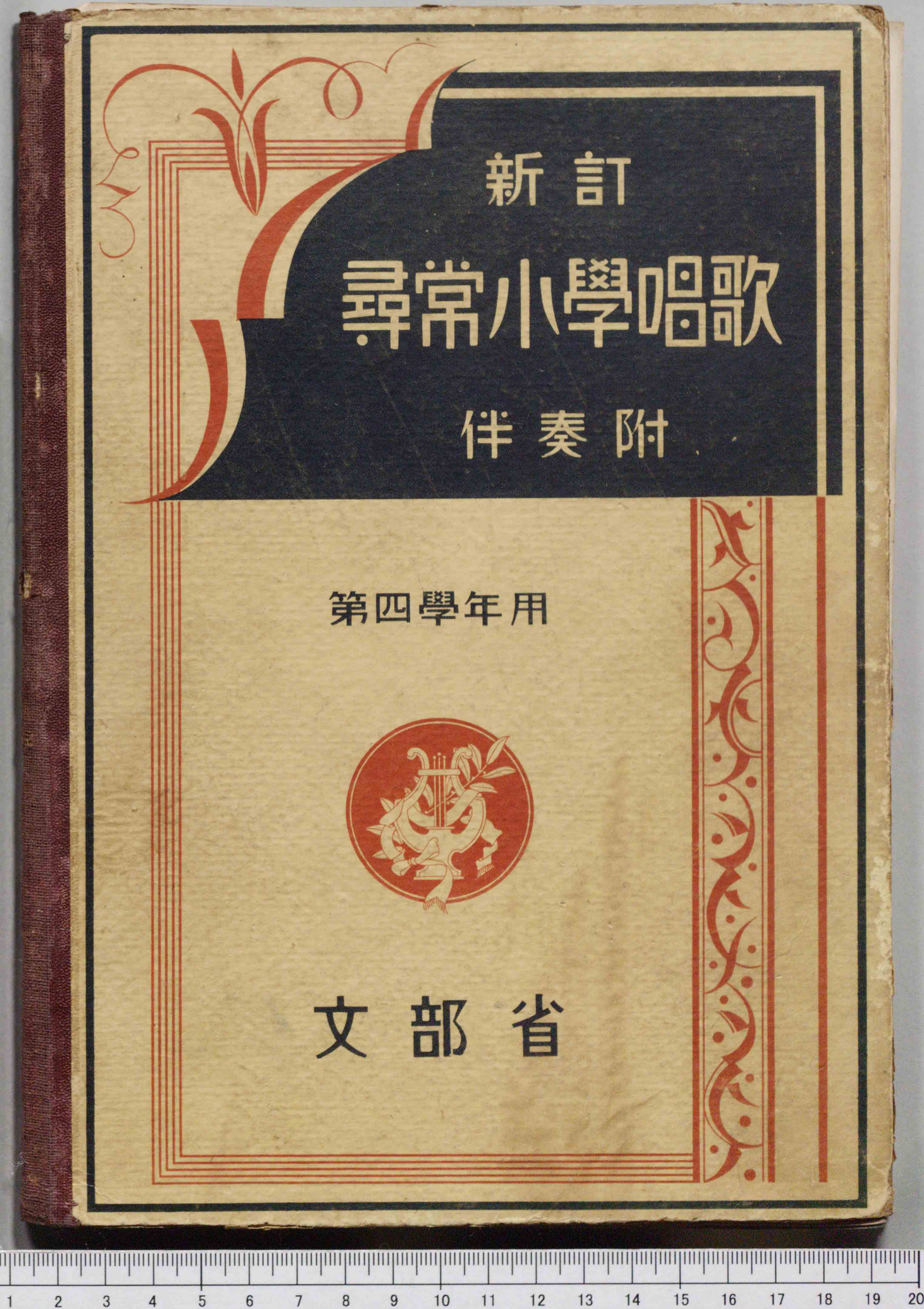
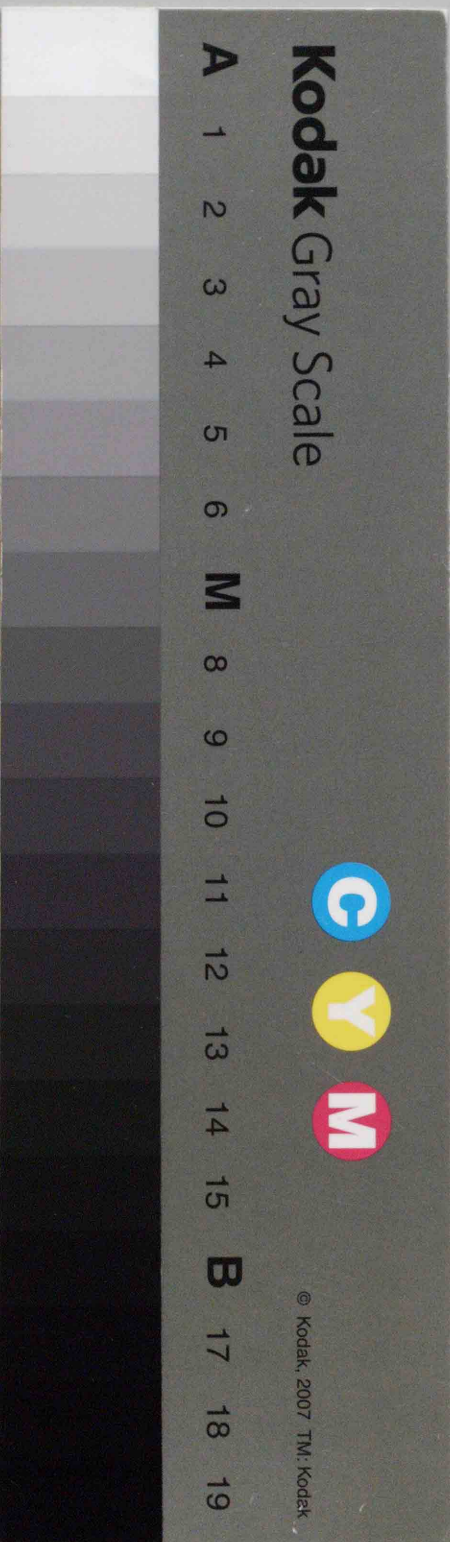
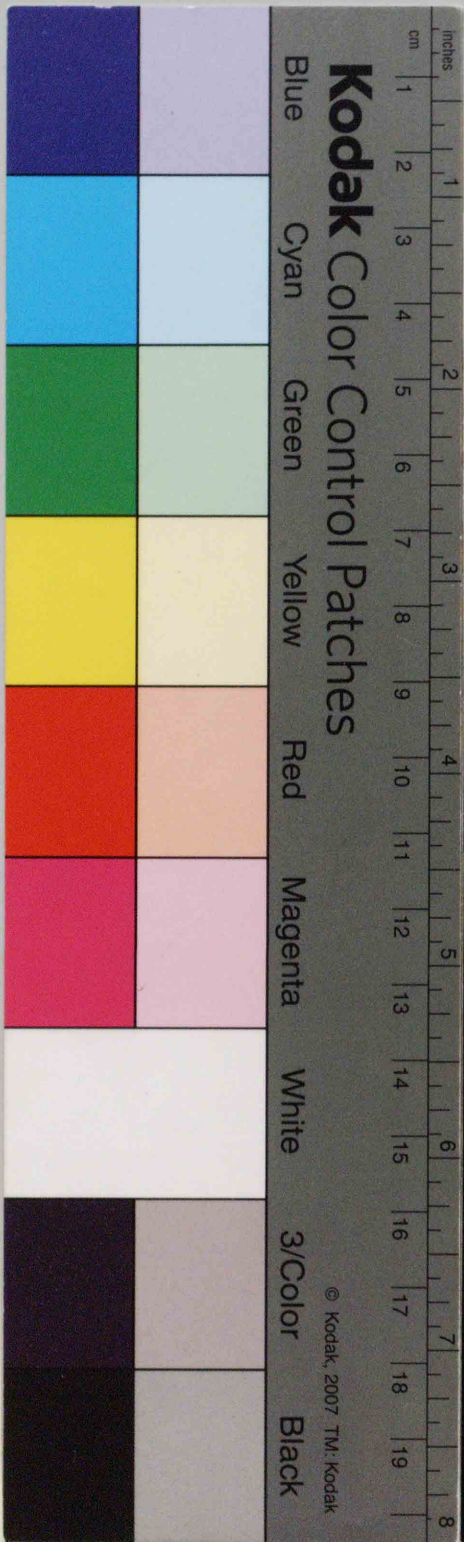


40360

教科書文庫

4
760
31-1933
0130f 49407



中央図書館

和平論研究 的 年 月 日

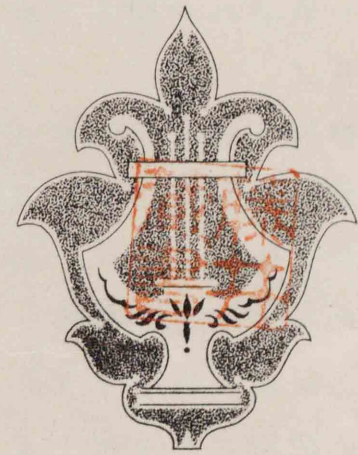
広島大学図書

0130449407



新訂
尋常小學唱歌

伴奏附
第四學年用



文部省

緒 言

- 一、本書ハ音楽教育ノ進歩ト時代ノ要求トニ鑑ミ從來本省著作ニ係ル「尋常小學唱歌」ニ改訂ヲ加ヘタルモノナリ。
- 二、本書ハ每卷二十七章トシ、取扱者ニ選擇ノ餘地ヲ與ヘタリ。
- 三、本書ノ歌詞ハ、舊歌詞中ノ適切ナルモノ、新作ニ係ルモノ、及ビ尋常小學國語讀本・尋常小學讀本中ノ韻文ノ一部ヨリ成ル。
- 四、本書ノ歌詞ハ努メテ材料ヲ各方面ニ採リ、文體・用語等ハ成ルベク讀本ト歩調ヲ一ニセンコトヲ期セリ。
- 五、本書ノ教材排列ハ強ヒテ程度ノ難易ノミニヨラズ、一面季節ニツキテモ考慮セリ。
- 六、本書ハ取扱者ノ便宜ノタメ、唱歌曲ノミノ樂譜ヲ掲ゲタルモノト、伴奏附ノ樂譜ヲ掲ゲタルモノト、二種類ヲ作製セリ。教授ニ際シテハ其ノ何レヲ採用スルモ可ナリ。
- 七、伴奏附ノ樂譜ヲ使用スル場合ニハ、前奏・後奏ノ如キハ時トシテ省略スルモ可ナリ。

昭和七年十一月 文 部 省

目 次

一	春の小川	2
二	かげろふ	6
三	みなかの四季	10
四	靖國神社	14
五	蠶	18
六	五月	20
七	藤の花	24
八	動物園	26
九	お手玉	28
一〇	曾我兄弟	32
一一	夢	34
一二	雲	38
一三	漁 船	42
一四	夏の月	44
一五	牧場の朝	48
一六	水 車	52
一七	廣瀬中佐	54
一八	たけがり	56
一九	山 雀	60
二〇	霜	62
二一	八幡太郎	64
二二	村の鍛冶屋	68
二三	餅つき	72
二四	雪合戦	76
二五	近江八景	78
二六	何事も精神	82
二七	橋中佐	86

春の小川

春の小川

♩ = 104 Fine

sva. Fine

mf 軽快に *mp*

ペダルを使用して

ニハルノヲガハハサラサラナガ
 二はるのをがははさらさらなが
 三ハルノヲガハハサラサラナガ

左手軽く *mf*

キシノスミレヤレンゲノハナニ
 えびやめたかやこぶなのむれに
 ウタノジャウズヨイトシキコドモ

mp

二

春の小川

ニホヒメテタクイロウツクシク
 けふーもいちにちひなたにいであて
 コーエヲソロヘテヲガハノウタヲ

f

サケヨサケヨトササヤクゴトク
 あそべあそべとささやくごとく
 ウタヘウタヘトササヤクゴトク

sva. *D.C.*

p *mp* *D.C.*

ペダルを用ひずに

三

一、春の小川

一、春はるの小が川ははさらさら流ながる。
 岸しのすみれやれんげの花はなに、
 にほひめでたく、色いろうつくしく
 咲さけよ咲さけよと、ささやく如ごとく。
 二、春はるの小が川ははさらさら流ながる。
 蝦えびやめだかや小こ鮒なまの群ぐんに、

今日けふも一日いちにちひなたに出いでて下くだ遊あそべ遊あそべと、ささやく如ごとく。
 三、春はるの小が川ははさらさら流ながる。

歌うたの上手じょうずよ、いとしき子ども、
 聲こゑをそろへて小こ川がの歌うたを
 うたへうたへと、ささやく如ごとく。

か げ ろ ふ

か
げ
ろ
ふ

♩ = 138

mp

— ユ ラ ユ
ニ ヨ ら ヨ

mp

ラ ユ ラ キ ラ キ ラ キ ラ ハ ル ノ ヒ ノ
ら ヨ ら き ら き ら き ら は る の ひ の

mf

ヒ カ リ ヲ ウ ケー テ イ シ ノ ホ ト リ ニ
の ど け さ み せ て く さ の は ぎ 糸 に

六

か
げ
ろ
ふ

mf

ハ シ ノ ウ ヘ ニ モ ユ ル カ ゲ ロ フ —
は な の う へ に も ヨ る か げ ろ ふ —

f *p*

ミ チ ュ ク ヒ ト ノ タ モ ト ニ モ ー ツ レ
く づ れ て た ち て み た れ て ヨ ー れ て

mp *rit.*

ト ビ カ フ テ フ ノ ハ カ ー ゼ ニ ユ レ テ
あ る か と み れ ば は や ー か げ も な く

七

二、かげろふ

一、ゆら ゆら ゆら

きら きら きら

春の日の光を受けて

石のほとりに、橋の上に

燃ゆるかげろふ。

道行く人の袂にもつれ、

飛びかふ蝶の羽風にゆれて。

二、ゆら ゆら ゆら

きら きら きら

春の日のどけさ見せて

草の葉末に、花の上に

燃ゆるかげろふ。

くづれて立ちて、亂れてゆれて

あるかと思れば、はや影もなく。

おなかの四季

おなかの四季

$\text{♩} = 116$
mf

一 ミチヲハサシテハタイチメニ
 二 ならふすげがさすずしいこ
 三 ニヒヤクトヲカモコトナク
 四 そたををりたくのそばで

ムギホガテルナハハナザカリ
 うたひながらにうゑゆくさなへ
 ムラノマツリノタイコガヒビク
 よるはよもやまはなしがはずむ

p

ネムルテフテフトビタツヒバリ
 なががいなつのひいっしかくれて
 イネハミガイルヒヨリハツク
 ははかてぎはのたいこなます

10

おなかの四季

フクヤハルカゼタモトモカウルク
 うゑるはてさきにとつきかげうご
 カツテ一ヒヒロゲテヒとニカソカ
 これもひなかののしこしざかな

mf

アチラコチラニクハツムヲトメ
 かへみるみシちみちあはみかへ
 モミナシアちねずみのおとも

ヒマシヒマシニハルゴモフトル
 はずゑははずによつゆかがひかる
 かなけてのろきはにゆきふりエガ
 はずろきはにゆきふりエガ

11

三、あなかの四季

一、道をはさんで畑一面に、

麦は穂が出る、菜は花盛。

眠る蝶蝶、とび立つひばり、

吹くや春風、たもとも軽く、

あちらこちらに桑つむ少女、

日まし日ましにはるごも太る。

二、ならば菅笠、涼しいこゑで

歌ひながらに植行く早苗、

ながい夏の日いつしか暮れて、

植ゑる手先に月かけ動く。

かへる道道あと見かへれば、

葉末葉末に夜つゆが光る。

三、二百十日も事なくすんで、

村の祭の太鼓がひびく。

稲は實がいる、日和はつづく、

刈つて、ひろげて、日に乾かして、

もみに仕上げて、俵につめて、

家内そろつて、笑顔に笑顔。

四、そだを折りたくゑるりの側で、

夜はよもやま話はずむ。

母がてぎはの大根脛、

これもあなかの年こしぎかな。

棚の餅ひく鼠の音も

更けて、軒端に雪降積る。

靖國神社

靖國神社

♩ = 66

一ハ 一ナ ハ サ クラ ギ ヒ ト ハ ブ シ
ニ い の ち は か 一 ろ く ぎ は お も し

ソ ノ サ ク ラ ギ ニ カ コ マ ル ル
そ の ぎ を ふ み て お ほ き み に

ヨ ヲ ヤ ス ク 一 ニ ノ ミ ヤ シ ロ ヨ
い 一 の ち さ さ げ し ま す ら を よ

靖國神社

ミ ク ニ ノ タ 一 メ ニ イ サ ギ ヨ ク
か 一 ね の と り る の お く ふ か く

ハ 一 ナ ト チ リ ニ シ ヒ ト ビ ト ノ
か み が き た 一 か く ま つ ら れ て

タ 一 マ ハ コ コ ニ ゾ シ ズ マ レ ル
ほ ま れ は よ 一 よ に の こ る な り

四、靖國神社

一、花は櫻木 人は武士。

その櫻木に圍まるる

世を靖國の御社よ。

御國の爲に、いさぎよく

花と散りにし人人の

魂は、ここにぞ鎮まれる。

二、命は軽く、義は重し。

その義を踐みて大君に

命ささげし大丈夫よ。

銅の鳥居の奥ふかく

神垣高くまつられて、

譽は世世に残るなり。

蠶

♩ = 112
mf

一カセアタタカキゴグワツノーハジメ
二よたびのねむりいつしーかーすぎて
三カミモムスバズヨルサーヘーイネズ

サトノヲトメガトルヤハバウキ
はしのふとさはこゆびとなりぬ
ココロツクシテヒトツキアマリ

f

ハキオローシタールハルノカヒコ
きそひきそひーてくははむおと
ットメシーカヒーノミエタルケフー

mf

サナーガラクローキチーリノーゴトク
このーはにあめーのそーそぐーごくとく
ウレーシヤマユーハヤーマノーゴトク

五、蠶

一、風暖き五月のはじめ、
里の少女が取るや羽箒。
掃きおろしたる春のかひこ、
さながら黒き塵の如く。

二、四度の眠いつしか過ぎて、
箸の太さは小指となりぬ。
木の葉に雨のそそぐ如く、
きそひきそひて桑はむ音。

三、髪も結ばず、夜さへ寝ねず、
心つくして一月あまり
うれしや、繭は山の如く。
努めしかひの見たる今日、

五 月

五 月

$\text{♩} = 46$

mp

一カゼヲタルゴ
ニカゼカをるご

mp

con Red.

グワツノヤマヲミアグレバヤ
ぐわつのはまにきてみればは

マヲオホヘルシヒノキノワ
まにさいたるはまなすのす

mf

カバアヲバノヒニハエテサ
なにはひつつひにてりて

mf

mp

ワサソユラグイサーギヨササ
らゆらゆらぐうつくしささ

mp

p

ナガライキテアルヤウーニ
ながらものをいふやうーに

p

六五月

一、風わたる

五月の山を見上ぐれば

山をおほへる椎の木、

若葉・青葉の陽に映えて、

さわさわゆらぐいさぎよさ。

さながら生きてあるやうに。

二、風かをる

五月の濱に来て見れば、

濱に咲いたるはまなすの、

砂にはひつつ陽に照りて、

ゆらゆらゆらぐ美しさ。

さながらものをいふやうに。

藤の花

藤の花

♩ = 104

一ノヤ マモカ スム ハルサメノ
ニひばりのこゑは ゆふ一ぞらに

ハレテ ナゴリノ ミヅカサニ
き一えて こなたの やぶばたや

ク ルマ ハゲシヤ フチノハナ
ほむぎにとどくふぢのはな

藤の花

シブキニ スレテ ヒニハユル
しづかに ゆれて ひはくるる

七、藤の花

一、野山もかすむ春雨の

晴れて、なごりの

水嵩に車はげしや藤の花。

しぶきに濡れて、日に映ゆる。

二、雲雀の聲は夕空に

消えて、此方の

藪畑や穂麥にとどく藤の花。

しづかに揺れて、日は暮るる。

動物園

動物園

♩ = 76

一 ドウ ブ ツ エン ノ ノ ド カ ナ ゴ ゴ ハ
 ニ ら い お ん も と ら も ね む つ て る る が
 ミ キ ノ ボ リ ジ ャ ウ ズ ブ ラ ン コ ジ ャ ウ ー ズ

ク ジャ ク ガ ス ツ カ リ ト ク イ ニ ナ ツ テ
 ら く た は の ん き な と ぼ け た か ほ て
 オ サ ル ハ イ ツ テ モ ア イ キ ャ ウ ー モ ノ ヨ

ウ チ デ ユ ウ イ ツ バ イ ヒ ロ ゲ テ ミ セ ル
 せ ん べ い た べ て は け ろ り と し て る
 ガ テ ウ ー ノ カ ナ テ ル オ ー ケ ス ト ラ ニ

動物園

キ ン ビ カ モ ヤ ウ ー ノ ハ レ キ ノ イ シ ャ ウ ー
 こ き や う ー の さ ば く も わ す れ た や う ー に
 ヨ チ ョ チ ダ ン ス ヲ ア ヒ ル ガ ヲ ド ル

八、動物園

一、動物園のどかな午後は、
 孔雀がすつかり得意になつて、
 うち中一はひろげて見せる、
 金ぴか模様の晴着の衣裳。

二、ライオンも、虎も、眠つてゐるが、
 駱駝は、のんきなとぼけた顔で、
 煎餅たべては、けろりとしてゐる、
 故郷の沙漠も忘れたやうに。

三、木のぼり上手、ぶらんこ上手、
 お猿はいつても愛敬者よ。
 鷺鳥のかなでるオーケストラに、
 よちよちダンスを、あひるが踊る。

お手玉

並行形

右手の四小節 左手に先行 右手にお手の上り下りを繰り返して

♩=100

お手玉

一 ヒイ フウ ミ ヨ イ ツ ツ ノ ア ツ カ ヒ
 ニ しろ くら あか あを むら さ き く は へ て
 三 ウへ シタ タテ ヨコ リヤウ テ ノ ハ ヤ ワ ザ

テ サ キ ノ ハ タ ラ キ ヒ ト ツ ニ ウ - -
 い つ つ の お て た ま あ - や に と ん -
 ミ ゴ ト ニ ウ ケ ト メ イ - ツ ツ イ ツ -

ケ - - テ サ ラ リ ト ナ ゲ レ バ
 た - - り ち ど り に ぬ け た り
 イ - - ロ ノ コ ラ ズ ソ ロ ヘ テ

お手玉

ミ タ レ テ オ チ テ ハ ハ ナ モ ヤウ - ハ ナ
 と び か ひ ゆ き か ふ て ふ - の ま ひ て ふ -
 マ ヅ マ ヅ イ ツ クワ ン カ シ マ シ タ カ シ

モ - - ヤウ - - -
 の - - ま - - ひ
 マ - - シ - - タ

この二小節 お手の上下は二小節曲に
合致すると十分なつ

九、お手玉

一、一・二・三・四、五つのあつかひ、

手先のはたらき、

一つに受けて、

さらりと投げれば、

みだれて落ちては

花もやう、花もやう。

二、白・黒・赤・青、紫加へて、

五つのお手玉、

あやに飛んだり、

三折

ちどりにぬけたり、

飛びかひ行きかふ

蝶のまひ、蝶のまひ。

三、上・下・縦・横、両手の早わざ、

みごとに受止め、

五つ五色

残らず揃へて、

まづまづ一貫

かしました、かしました。

曾我兄弟

曾我兄弟

♩ = 88

一 フ ジ ノ ス ソ ノ ノ ヨ ハ フ ケ テ ウ
 二 き た れ と き む ね こ は リ ひ こ そ じふ
 三 ト モ ニ タ イ ム ツ マ フ チ マ ー カ サ シ じふ
 四 お き よ す け つ ね ち ち の あ た じふ
 五 ア タ ハ ム ク イ ス イ マ ハ ト テ デ

タ ゲ ノ ト ヨ ー ミ シ ヅ マ リ ヌ ヤ
 ー は ち ね ん の う ら ー ら ば ば カ マ
 ザ ー ス ヤ カ タ ニ ウ ー ン ン ン ン ン
 ー ら ー ご ら ー ー げ ヲ ン ン ン ン ン
 ア ー ヘ デ ア ヘ ト ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ

カ ー タ ヤ カ タ ノ ヒ ハ キ エ テ ア
 で ー や あ に う へ こ よ ひ こ シ ソ た せ
 タ ー キ ク ド う ー ハ エ ヒ フ シ カ し せ
 く ー ら を ド け つ て オ ビ フ カ し せ
 リ シ モ コ サ ー メ フ リ イ デ テ ソ

曾我兄弟

ヤ メ モ ワ カ ー ヌ サ ツ キ ヤ ミ
 た ひ と う ち ー に か た き を は
 ン ゴ モ シ ラ ヌ ヌ タ イ ビ キ
 き ー ん と す す ー を は ー ー ー
 ラ ニ モ ナ ノ ル ホ ト ト キ ギ ス

一〇、曾我兄弟

- 一、富士の裾野の夜はふけて、うたげのとよみ静まりぬ。屋形屋形の灯は消えて、あやめも分かぬさつきやみ。
- 二、來れ、時致今宵こそ、十八年のうらみをば。
「いでや、兄上、今宵こそ、ただ一撃に敵をば。」
- 三、共に松明ふりかざし、目ざす屋形にうち入れば、かたき工藤は酔臥して、前後も知らぬ高軀。
- 四、起きよ、祐經、父の仇、十郎五郎、見參」と、
枕を蹴つておどろかし、起きんとするを、はたと斬る。
- 五、仇は報いぬ、今はとて、出合へ、出合へ。と呼ばはれば、折しも小雨降りいでて、空にも名のるほととぎす。

夢

夢

♩ = 84

pp

p

一キ ン ノ ジ ドウ 一 シヤ ニ
ニギ ン の ひ かう 一 き に

p

cresc.

トビノ ル ト ハシル ヨ ハシル ヨ
とびの る と あがる よ あがる よ

cresc.

夢

mf

ドローマ デ モ オホキナミ チヲ マツ シクラ
どこーま ても かさなるく もを つきぬけて

mf

p

f

トウ ー トウ ー ガケカラ サカサマニ
とう ー とう ー くわせい の せかいへと

f

mp

オチタト オモへバ ユメダツタ
ついたと おもへば ゆめだつた

p

mp

pp

sf

二、夢

一、金の自動車に飛乗ると、

走るよ走るよ、

何處までも、

大きな道をまっしくら、

とうとう崖からさかさまに、

落ちたと思へば、

夢だった。



二、銀の飛行機に飛乗ると、

上るよ上るよ、

何處までも、

重なる雲を突抜けて、

とうとう火星の世界へと、

ついたと思へば、

夢だった。

雲

雲

mf $\text{♩} = 104$

一 ア サヒニ モ エレーバ モ ミノ キ ス
 ニ と きに は つ らな る み ねと な り
 三 ハ ルケキ ヤ マノハ ト ホキ オ キ

ユフ ー ヒニ ハ ユレーバ ニ シキニ テ
 と きに は か さな る な みと み え
 シ ヅカニ ヤ スムート ミ ルウチ ニ

f

ハ レタ ルーソ ラノ シ ロム クー ハ
 あ るひ は け もの と りの は ね
 オ ホゾ ラーソ タリ ウ ミヲ コー エ

雲

ア メフル マーヘニ ス ミヅメー ト
 う を の う ろこ と く さぐさー に
 ア ランヲ オーコシ ア メヲ ヨー ビ

p

カ ハルゾーフ シギ ク モーノ イ ロ
 か はるぞーふ しぎ く もの さ ま
 カ ハルゾーフ シギ ク モーノ ワ ザ

三、雲

一、朝日に燃ゆればもみの絹
 夕日に映ゆれば錦にて
 晴れたる空の白無垢は
 雨降る前に墨染と、
 變るぞ不思議 雲のいろ。
 二、時には連なる峯となり、
 時にはかさなる波と見え、

あるひは獸 鳥のはね、
 魚のうろこと種類に、
 變るぞ不思議 雲のさま。
 三、遙けき山の端 遠き沖、
 しづかに休むと見る中に、
 大空わたり、海を越え、
 あらしを起し、雨をよび、
 變るぞ不思議 雲のわざ。

漁 船

漁
船

♩ = 76

一 エンヤラ エンヤラ ロビヤウーシ ソロヘテ
二 ゆらりや ゆらりと なみまに ゆられて
三 エンヤラ エンヤラ エモノニ イサンテ

ア サヒノ ミナトヲ コキダス レフーセン
い そには あみぶね おきには つりぶね
イ リヒノ オキヲバ イソイデ コグフネ

ミヨミヨ アノクモ ケフーコ ソタイレー
みよみよ あれみよ かかるは とれるは
ミヨミヨ ハマベニ ツマコガムカヘル

四二

漁
船

ソレコゲ ソレコゲ オモカチ トリカチ
あみにも いとも さかなの かずかず
ソレコゲ コゲヨヤ ロビヤウーシ ハヤメテ

一三、漁 船

一、えんやら、えんやら、艦拍子そろへて
朝日の港を漕出すれふ船。
見よ、見よ、あの雲、今日こそ大れふ。
それ、漕げ、それ、漕げ、おも舵とり舵。
二、ゆらりや、ゆらりと、浪間に揺られて、
磯には網船、沖には釣船。
見よ、見よ、あれ、見よ。かかるは、捕れるは。
網にも、糸にも、魚のかずかず。
三、えんやら、えんやら、獲物に勇んで
入日の沖をば急いで漕ぐ船。
見よ、見よ、濱邊に妻子が迎へる。
それ、漕げ、漕げよや、艦拍子早めて。

四三

夏の月

夏の月

♩ = 108

mp

mp

一ス ズシ イ カゼ ニ ユラ ユラ ト
ニす ずし い かぜ に ゆら ゆら と

mp

mf

ナ ミウツ ヒロイ イ ナダ ノ ウヘニ
ゆ ら れ る か や の な か か ら み れ ば

mf

四四

夏の月

mp

イツノマニ ウキデタカ マンマルイ ナツノツキ
いつのまに でてきたか またここへ なつのつき

mp

mp

キレイナカホシテ ニコニコト
うれしいかほして にこにこ と

mp

mf

ソラカラワタシヲ ナガメテ ル
まどから わたしを のぞいて る

mf

四五

一四、夏の月

一、涼しい風に、ゆらゆらと
 波うつ広い稻田の上に、
 いつの間に浮出たか、
 まんまるい夏の月。
 きれいな顔して、にこにこと、
 空から私をながめてる。

二、涼しい風に、ゆらゆらと

ゆられる蚊帳の中から見れば、
 いつの間に出て来たか、
 また此所へ夏の月。
 嬉しい顔して、にこにこと、
 窓から私をのぞいてる。

牧場の朝

右手旋律 左手分教
伴奏(右手に旋律を弾き左手にアルペジオ)

♩ = 132

Musical score for the first system on page 48. It features a vocal line in treble clef and piano accompaniment in bass clef. The key signature is one sharp (F#) and the time signature is 4/4. The tempo is marked as ♩ = 132. The piano part includes a dynamic marking of *p* and a triplet of eighth notes in the final measure.

Musical score for the second system on page 49. It continues the vocal line and piano accompaniment from the previous page. The piano part includes dynamic markings of *mf* and *p*. The vocal line includes Japanese lyrics.

一 タ ダーイ チ メ ンニ タ チーコ メ タ マ
 ニ もう ー お き だ した こ やーご や の あ
 三 イ マーサ シ ノ ボル ヒ ノーカ ゲ ニ ユ

キ バノ ア サ ノ キ リ ー ノ ウ ミ
 た り に た か い ひ と ー の こ 系
 メ カラ サ メ タ モ リ ー ヤ ヤ マ

ポ プラ ナ ミーキーノ ウ ツ ス リ ト ク
 き り に つ つーまーれ あ ち こ ち に う
 ア カイ ヒ カーリーニ ソ メ ラ レ タ ト

ロ イ ソ コ カ ラ イ サ マ シ ク カ
 こ く ひ つ じ の い く む れ の す
 ホ イ ノ ズ エ ニ ボ ク ドウ ー ノ フ

ネ ガ ナ ー ル ナ ル カ ン カ ン ト
 ず が な ー る な る り ん り ん と
 エ ガ ナ ー ル ナ ル ピ イ ピ イ ト

♪♪♪♪♪♪♪♪

一五、牧場の朝

一、ただ一面に立ちこめた牧場の朝の霧の海。
 ポプラ並木のうつすりと黒い底から、勇ましく

鐘が鳴る鳴る、かんかんと。

二、もう起出した小舎小舎のあたりに高い人の聲。

霧に包まれ、あちこちに、動く羊の幾群の

鈴が鳴る鳴る、りんりんと。

三、今さし昇る日の影に夢からさめた森や山。

あかい光に染められた遠い野末に、牧童の

笛が鳴る鳴る、びいびいと。

水 車

水
車

♩ = 132

mp mf

一 モモノハナチルヲガハノミヅニヒトツカカタ
ニツキノナガレるをかはのみづにひとつかかた

mp mf

ミヅグルマノドカニテラスハルーノヒ
みづぐるまみぎはのむしのなくねに

水
車

f mf

アビテコットンコットンクルマハマハル
つれてこつとんこつとんくるまはまはる

f mf

コットンコットンクルマハマハル
こつとんこつとんくるまはまはる

一六 水 車

一、桃の花散る小川の
水に、
一つかかた水車。
のどかに照らす
春の日浴びて、
こつとん、こつとん、
車は廻る。

二、月の流れる小川の
水に、
一つかかた水車。
汀の蟲の
鳴く音につれて、
こつとん、こつとん、
車は廻る。

こつとん、こつとん、
車は廻る。

こつとん、こつとん、
車は廻る。

廣瀬中佐

廣瀬中佐

♩ = 112

mf

一 ト ド ロ ク ツ ツ オ ト ト ビ ク ル ダ ン グ ワ ン
 ニ セ ン ナ イ ク マ ナ ク タ ツ ヂ ヂ ヂ ヂ ヂ ヂ ヂ ヂ ヂ ヂ
 ミ イ マ ハ ト ボ ー ト ニ ウ ツ レ ル チ ュ ウ ー サ

ア ラ ナ ミ ア ー ラ フ テ ツ キ ノ ウ ヘ ニ
 よ ー ベ ど こ た ヘ ズ さ が セ ど み え ズ
 ト ビ ク ル タ ー マ ニ タ チ マ チ ウ セ テ

p

ヤ ー ミ ヲ ツ ラ ヌ ク チ ュ ウ ー サ ノ サ ケ ビ
 フ ー ね は し た い に な み ま に し づ み
 リ ョ ー ジ ュ ン カ ウ ー グ ツ イ ウ ラ ミ ゴ フ カ キ

五四

廣瀬中佐

mf

ス キ ノ ハ イ ツ コ ー ス キ ノ ハ キ ズ ヤ
 テ キ タ ン イ よ い よ あ た り に し げ し
 グ ン シ ン ヒ ロ セ ト ソ ノ ナ ノ コ レ ド

一七、廣瀬中佐

一、轟く砲音、飛來る彈丸。
 荒波洗ふデツキの上に、
 闇を貫く中佐の叫。

「杉野は何處、杉野は居ずや。」

二、船内限なく尋ぬる三度。
 呼べど答へず、さがせど見えず。
 船は次第に波間に沈み、
 敵弾いよいよあたりに繁し。

三、今はとボートにうつれる中佐、
 飛來る彈丸に忽ち失せて、
 旅順港外、恨ぞ深き、
 軍神廣瀬と其の名残れど。

五五

たけがり

たけがり

$\text{♩} = 84$

ア キ ノ ヒ ノ ソ ラ ス ミ ソ タ リ
た どり ゆ く ほ そ み ち づ た ひ

カ ゼ ア タ タ カ ニ サ テ モ ヨ キ ヒ ヤ
は や か う ー ば し く き の こ に ほ へ り

たけがり

ヤ マ ア ソ ビ ス ル ニ ヨ キ ヒ ヤ
や ま か ぜ に き の こ か を れ り

ト モ ヨ コ ヨ テ カ ゴ ラ モ チ テ
う れ し こ の ま つ の ね も と に

イ ザ ヲ ラ ヤ マ ニ キ ノ コ タ ヅ ネ ン
ま づ み つ け つ と た か く よ ぶ こ ゑ

ヤ マ フ カ ク ユ キ テ タ ヅ ネ ン
や ま び こ に ひ び く た よ び こ ゑ

イ テ ヤ ア ノ イ ハ ノ コ カ ゲ ニ

ミ ナ ヲ チ ヨ リ テ エ モ ノ カ ズ ヘ ン

タ ケ ガ リ ノ イ サ マ ク ラ ベ ン

一八、たけがり

秋の日の空すみわたり、
 風暖に、さてもよき日や。山遊するによき日や。

友よ、来よ、手かごを持ちて。

いぎ、裏山にきのこたづねん、山深く行きてたづねん。

たどり行く細路づたひ、

はや、かりばしくきのこ匂へり。山風にきのこかをれり。

「うれし、この松の根もとに、まつ見つけつ。」と高く呼ぶ聲、

やまびこにひびく呼聲。

いでや、あの岩の小かげに、皆うちよりてえもの數へん、

茸狩のいさをくらべん。

山 雀

山
雀

♩ = 112
mf

一 クル クル マ ハ ル メ ガ マ ハ ル
ニ よい こら ひ い た つ な ひ い た
三 ツケ ツケ カ ネ ヲ ヒ イ ラ ウ ミ

ト シ バウ ガ ヘ リ チウ ガ ヘ リ
も い ちど ひ い た つ な ひ い た
オ テ ラノ カ ネ ガ ナ ル ト キ ハ

mp

カ ハ セ ニ カ カ ル ミ ツ グ ル マ
つ る べ の み つ を こ ぼ す ま い
オ マ ヘ モ ヤ マ ガ コ ヒ シ カ ロ

山
雀

mf

ビイ ビイ ヤ マ ガ ラ ビイ ヤ マ ガ ラ
びい びい や ま が ら びい や ま が ら
ビイ ビイ ヤ マ ガ ラ ビイ ヤ マ ガ ラ

一、くるくる廻る、目が廻る、
とんばう返り、宙返り、
川瀬にかる水車。い山雀。
川瀬にかる水車。い山雀。
二、よいら引いた、綱引いた、
もいちど引いた、綱引いた。
釣瓶の水をこぼすまい。
三、つけつけ鐘を、一・二・三。
お寺の鐘が鳴る時は、
お前も山雀がこひしかる。
い山雀。
い山雀。
い山雀。

一九、山 雀

霜

霜

♩ = 96

p *mf* *p*

一、サ サ ノ ハ ノ シ ロ キ ハ シー モ ノ ヒ
二、あ り あ け の き え に し か ー げ を ま

mf *p*

カ リ ニー テ マ ダ ヨ ハ フー カ ー シ ノ
つ の は ー に し ば ー し の ー こ せ る し

霜

一、笹の葉の
白きは霜の光にて、

二、霜
消え明の
しに影を松の葉に
ばし残せる

野野の道
野野の道
まだ夜は深し

八幡太郎

八幡太郎

♩ = 112

一 コ マ ノ ヒ ツ メ モ ニ ホ フ マ テ ミ
ニ お ち ゆ く て き ー を よ び と め て こ

チ ー モ セ ニ チ ル ヤ マ ヅ ク ラ カ ナ シ
ろ も の た て ー は ほ こ ろ び に け り て

ハ シ ナ ガ メ テ フ ク カ セ ヲ ナ
き は み か へ り と し を へ し い

六四

八幡太郎

コ ソ ノ セ キ ー ト オ モ へ ド モ カ
と ー の み だ れ の く る し さ に つ

ヒ ナ キ ナ ヤ ト ホ ホ エ ミ テ ユ
け た る こ と の め て た き に め

ル ク ウ タ セ シ ヤ サ シ サ ヨ
て て ゆ る し し や さ し さ よ

六五

三、八幡太郎

一、駒のひづめも匂ふまで、

道もせに散る山櫻かな。

しばしながめて、吹く風を

勿來の關と思へども、

かひなき名やとほほ笑みて、

ゆるく打たせしやさしさよ。

二、落ちゆく敵をよびとめて、

衣のたては縦びにけり。

敵は見かへり、年を経し

絲のみだれの苦しさに、

つけたることのめでたきに、

めでてゆるししやさしさよ。

村の鍛冶屋

政老三途伴が表現した曲の
神正師に示照し更に一歩進め
政詞全作りの零落園文に伴奏
よって面成せんとすとのてまの送つ

芸術型

石
他
の
よ
い
ソ
ノ
ウ
カ
サ

村の鍛冶屋

♩ = 84
前差に木切のむきとよへて
f (木の響のつもりで)
mp
Red. * Red. *

一 シ バ シ モ ヤ マ ズ ニ ツ チ ウ ツ ヒ ビー キ
二 あるじはなだかきいつこくおやぢ
三 カ タ ナ ハ ウ タ ネ ド オ ホ ガ マ コ ガー マ
四 か せ ぐ に お ひ つ く び ん ぼ ふ な く て

ト ビ チ ル ヒ ノ ハ ナ ハ シ ル ユ ダー マ
は や お き は や ね の や ま ひ し ら ず
マ グ ハ ニ サ ク グ ハ ス キ ヨ ナ ター ヨ
め い ぶ つ か ぢ や は ひ び に は ん じやう

六八

村の鍛冶屋

フ イーゴ ノ カゼーサ ヘ イ キ ヲ モ ツーガーズ
て つーより か たーし と ほ こ れ る うーでーに
ヘ イーソ ノ ウチーモノ ヤ ス マ ズ ウーチーテ
あ たーりに る のーなき し ごと の ほーまーれ
p
Red. * Red. *

シ ゴ ト ニ セ イ ダ ス ム ラ ノ カ デー ヤ
ま さ り て か た き は か れ が こ こーろ
ヒ ゴ ト ニ タ タ カ フ ラ ン ダ ノ テ キー ト
つ ち う つ ひ ひ き に ま し て た かーし
mf *dim.*
Red. * Red. * Red. *

六九

三、村の鍛冶屋

一、しばしも止まらずに槌うつ響。
 飛散る火の花、はしる湯玉。
 ふいごの風さへ息をもつがず、
 仕事に精出す村の鍛冶屋。
 二、あるじは名高きいつこく老爺
 早起・早寝の、病知らず。
 鐵より堅しとほこれる腕に
 勝りて堅きは、彼がこころ。

三、刀はうたねど、大鎌・小鎌、
 馬鋏に作鋏、鋤よ、鉋よ。
 平和のうち物休まずうちて、
 日毎に戦ふ、懶惰の敵と。
 四、かせぐにおひつく貧乏なくて、
 名物鍛冶屋は日日に繁昌。
 あたりに類なき仕事のほまれ、
 槌うつ響にまして高し。

餅 つ き

餅
つ
き

♩ = 100

軽快に

fp *f* *f* *mp*

mp

一ケフ 一ハ ウチデハ モチツキヂヤ
ニけふ 一は となりの もちつ き ぢや

p

f ゆるやかに *p a tempo*

メツタン コ ベツタン コ オトウサンガ ツイテ
べつたん こ べつたん こ おぢいさんが のして

f *lento lunga* *p a tempo*

七二

餅
つ
き

mf

オカアサンガ テガヘシネエ サンテ ヲーダヒ
おばあさんも てつたひをぢさん をばーさん

mf

p *f*

ウチヂユウー グルグルー テンテ コ マヒヂヤ
はちまきー たすきでー てんて こ まひぢや

p *f*

mp

シハスハ ミジカイ ソレツケ ソレツケ
おしやぐわつは めでたい それつけ それつけ

p *mp*

七三

二三、餅つき

一、今日はうちでは餅つきぢや。
 べつたんこ、べつたんこ。
 お父さんがついて、
 お母さんが手がへし、
 ねえさん手つだひ、
 うち中ぐるぐる、
 てんてこまひぢや。
 師走は短い、
 それつけ、それつけ。

二、今日は隣の餅つきぢや。
 べつたんこ、べつたんこ。
 お爺さんがのして、
 お婆さんも手つだひ、
 をぢさん、をばさん、
 鉢巻、たすきで、
 てんてこまひぢや。
 お正月はめでたい、
 それつけ、それつけ。

雪 合 戦

雪
合
戦

♩ = 76

一ハ レタル アーサーノ ユ キ ノ ハ ラ
二あ たりて ひーるーむ ひ げふ ー も の
三ケ キセ ン イーマート ミル ウ チ ニ

ヒ ガ シ ト ニーシーニ タ チ ワ カ レ
お それ ず すーすーむ がうー の も の
ウ シ ロ ニ ヒービーク キウー セ ン ノ

七六

雪
合
戦

ヨウ イ ハ ジメノ コ エノ シ タ
ゆ きを け ちらし ゆ きを あ ひ
ラ ツ パト ト ーモ ニ ニ シヒガ シ

テ ニテ ニ ト バス ユ キツ ブ テ
た がひ に よ する て きみ か た
イ チド ニ ド ツト ト キノ コ エ

二四、雪 合 戦

- 一、晴れたる朝の雪の原、東と西に立ちわかれ、用意はじめの聲の下、手に手にとばす雪つぶて。
- 二、あたりてひるむ卑怯もの、恐れず進む剛のもの、雪を蹴ちらし、雪をあび、互に寄する敵味方。
- 三、劇戦今と見るうちに、後にひびく休戦のラツパと共に、西東、一度にどつと鬨のこゑ。

七七

近江八景

mf $\text{♩} = 88$

—ビ

ハ — ノ カ タ チ ニ ニ タ リ ト テ ソ
 づ わ た り み ー ン せ た の は し か
 シ ヤ マ デ ラ ー ノ ア キ ノ ツ キ ク
 が か ら さ き ー の ひ と つ ま つ よ
 ツ ヨ ツ イ ツ ー ツ チ ツ レ テ ヤ

p

ノ ナ ヲ ヘ ー ル ミ ヅ ー ウ ミ ノ カ
 が や く い り ー ひ う つ つ ー く し や
 モ ヲ サ マ リ ー テ カ ゲ ー キ ヨ シ
 る ー の あ め に ぞ な を ー え た る
 バ セ ヲ サ シ ー テ カ ヘ ー リ ユ ク シ

f

ガ ミ ノ ゴ ト ー キ ミ ヅ ー ノ オ モ ア
 は づ の ま つ ー の い ろ ー は え て か
 ル ヨ リ サ キ ー ニ サ ク ー ハ ナ ハ ヒ
 た た の う ら ー の う き ー み だ う ー お
 ラ ホ ヲ オ ク ー ル ユ フ ー カ ゼ ニ コ

mf

カ ー ヌ ナ ガ メ ハ ヤ ツ ー ノ ケ イ 二 ま
 す ま ぬ そ ら ー の の ど ー け さ よ 三 イ
 ラ ー ノ タ カ ネ ノ ク レ ー ノ ユ キ 四 し
 ち ー くる か り ー も ふ ぜ ー い あ り 五 ミ
 エ ホ ド チ カ ー シ ミ キ ー ノ カ

1. 2. 3. 4. 5.

二五、近江八景

一、琵琶の形に似たりとて

其の名をおへる湖の、

鏡の如き水の面、

あかぬながめは八つの景。

二、まづ渡り見ん、瀬田の橋、

かがやく入日美しや。

粟津の松の色はえて、

かすまぬ空のどけさよ。

三、石山寺の秋の月、

雲をさまりてかげ清し。

春より先に咲く花は、
比良の高ねの暮の雪。

四、滋賀唐崎の「つ松」

夜の雨にぞ名を得たる。

堅田の浦の浮御堂、

落來るかりもふぜいあり。

五、三つ四つ五つうち連れて、

矢橋をさして歸り行く

白帆を送る夕風に、

聲程近し、三井のかね。

何事も精神

何事も精神

♩ = 92

ノ キヨ リ オ ツル ア マ ダ レ ノ
ハ ゲ ミ ー ス スムニ ナ ニ ゴ ト ノ
ち ひ さ き あ り も い そ し め ば
ふ る ひ ー す すむに な に ご と か

タ エ ズ ヤ ス マ ズ ウ ツ ト キ ハ
ナ ド ナ ラ サ ラ ン ー テ ツ セ キ ノ
た ふ ー を も き づ き ー つ ば め さ へ
な ど な ら ぎ ら ン ー ば ん じ や く の

イ シ ニ モ ア ナ ラ ウ ガ ツ ナ リ
カ タ キ モ ツ ヒ ニ ト ホ ス ベ シ
せ ん り の な み を わ た る な り
お も き も つ ひ に う つ す ベ し

八二

何事も精神

ソ レ ラ ハ ヒ ト ト ツ マ レ キ テ
ま し て や ひ と と う ま れ き て

イ ッ タ ン コ ー コ ロ サ ダ メ テ ハ
い つ た ん め ー あ て さ た め て は

コ ー ト ニ ウ ゴ カ ズ サ ソ ハ レ ズ
わ き め も ふ ら ず ー お こ た ら ず

八三

二六、何事も精神

一、軒よりおつる雨だれの、
 たえず、休まず打つ時は、
 石にも穴をうがつなり。
 我等は人と生まれ来て、
 一たん心定めては、
 事に動かず、さそはれず、
 はげみ進むに、何事の
 など成らざらん、鐵石の
 堅きもつひにとほすべし。

二、小さき蟻も、いそしめば、
 塔をもきづき、燕さへ、
 千里の波を渡るなり。
 ましてや人と生まれ来て、
 一たんめあて定めては、
 わき目もふらず、怠らず、
 ふるひ進むに、何事か
 など成らざらん、盤石の
 重きもつひにうつすべし。

橘 中 佐

橘
中
佐

$\text{♩} = 104$

p

一カバネハツモリテ
二みかたはおほかた
三ミクニノタメナリ

mf

ヤマヲツキチシホハナガレテ
うたれたりしばらくこをと
リクゲンノメイヨノタメゾト

八六

橘
中
佐

p

カハヲナス シュラノチマタカ
いさむれど はぢをおもへや
サトシタル コトバナカバニ

mf

シャオンズイ クモマヲモルル
つはものよ しすべきときは
チリハテシ ハナタチバナゾ

1.2. 3. *poco rit.*

ツキアヲシ
いまなるぞ
カグハシキ

八七

二七、橋中佐

一、かばねは積りて山を築き、
血汐は流れて川をなす、

修羅の巷か、

向陽寺。

雲間をもるる

月青し。

二、みかたは大方うたれたり、

暫

此處を」と諫むれど、

恥を思へや、

つはものよ。

死すべき時は

今なるぞ。

三、御國の爲なり、陸軍の

名譽の爲ぞ。と諭したる

ことば半ばに

散りはてし

花橋ぞ、

かぐはしき。

新訂
尋常小學唱歌
伴奏附

不許複製

文部省

第四學年用 定價金四拾六錢

昭和七年十二月二十七日 印刷
昭和八年二月十五日 發行

著作權者 文 部 省

發行者 大日本圖書株式會社
東京市京橋區銀座一丁目五番地

代表者 專務取締役 杉山常次郎

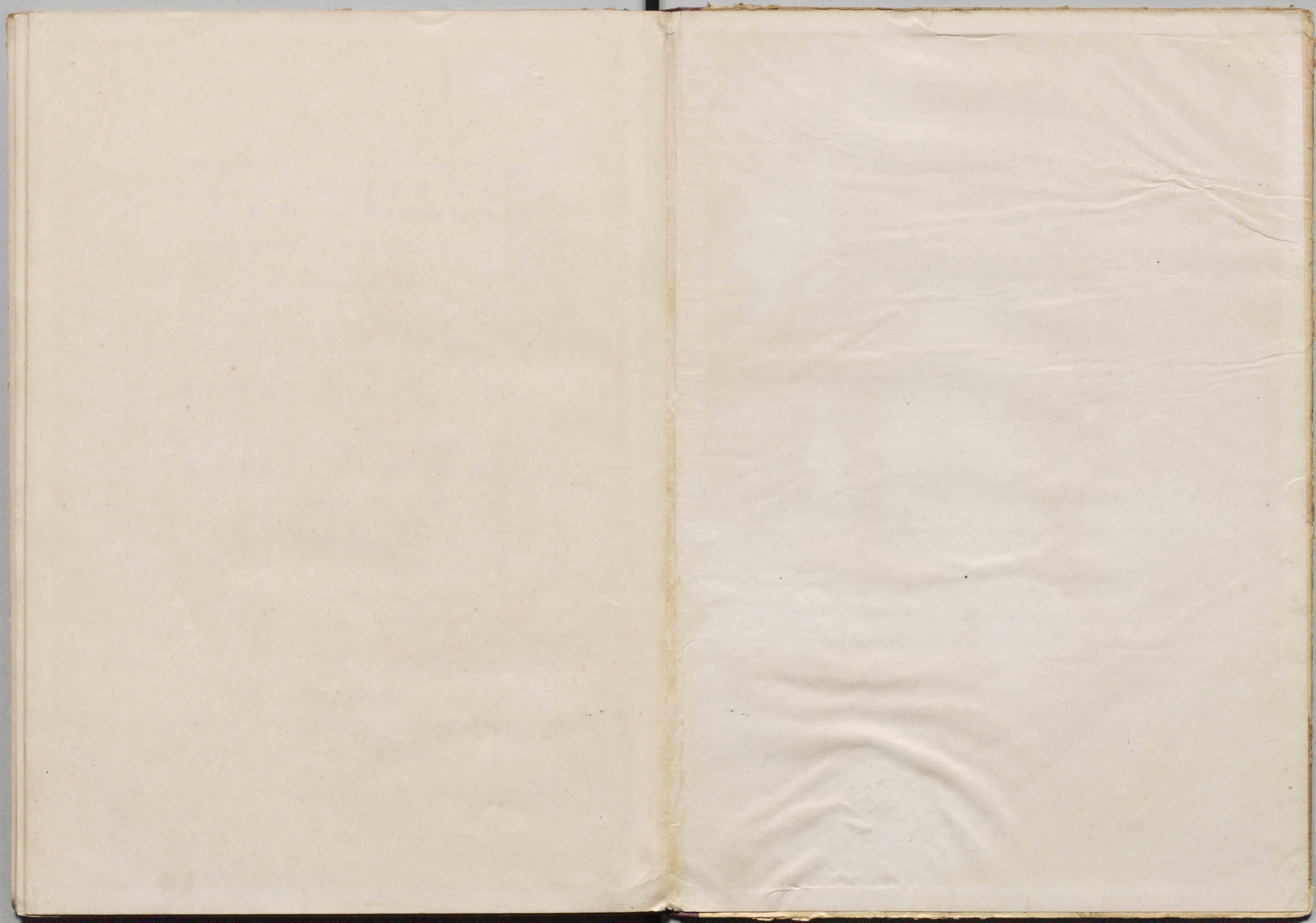
印刷者 大橋光吉
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行所 大日本圖書株式會社
東京市京橋區銀座一丁目五番地

振替貯金口座〔東京二一九番〕電話京橋二七三番二七四番

1000.0.19



坂井欽夫

広島大学図書
0130449407
